

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 24 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26590092

研究課題名(和文) 男性移住家事労働者の男性性の変容と再編 - イタリアのフィリピン人の事例

研究課題名(英文) Transformation and reconstruction of masculinities among male migrant domestic workers: A case study of Filipinos in Italy

研究代表者

長坂 格 (Nagasaka, Itaru)

広島大学・総合科学研究科・准教授

研究者番号：60314449

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：家事労働や育児、高齢者のケアを国際移住者が担うという再生産労働の国際分業が進展する中で、女性だけでなく、男性もまた国境を越えて移動し、再生産労働に従事してきた。本研究は、再生産労働の国際分業の研究において、これまでほとんど注目されることのなかったこれら男性移住家事労働者を対象として、彼らの移住経験を把握し、それを男性性の再編という観点から考察することを目的とした。1980年代以降、比較的多くの男性移住家事労働者が就労しているイタリアにおいて、フィリピン系男性家事労働者を対象としてインタビューと参与観察を実施した。

研究成果の概要(英文)：As “international division of reproductive labor” has advanced, it has been observed that not only women but also men have been migrating to economically developed countries to work as domestic workers or carers. However, sufficient attention has not been paid to these male migrant domestic workers in the previous studies of migration and gender. This research project aims to describe and analyse migratory experiences of male migrant domestic workers in light of their reconstruction of the notions of masculinities. The particular focus is on Filipino domestic workers in Italy where relatively many male migrant domestic workers have been working since the 1980s.

研究分野：文化人類学

キーワード：社会学 文化人類学 再生産労働の国際分業 男性性 フィリピン イタリア 家事労働者 ジェンダ

1. 研究開始当初の背景

経済的に豊かな国における女性の社会進出は、家事労働や育児、高齢者のケアなどの再生産労働の担い手の不足をもたらし、それを担う労働者の国際移住を拡大させてきた。

再生産労働の国際分業が進展していく中で、国際移動とジェンダーは、過去 20 年間の移住研究における最も重要な主題の一つであった。そこでは、移住先で家事労働者、介護労働者として就労する女性、とりわけ母親である移住者の就労状況や残された家族との関係について多くの実証研究がなされてきた。それらの研究は、女性の国際移動が、家族やコミュニティ、そして出身地社会におけるジェンダー関係をいかに変えるのか、あるいは変えないのかについて、異なるエスニティおよび階級の女性の事例から多角的に論じるとともに、国際移住の経験がいかにジェンダー化されているかを明らかにしてきた。しかしそのように女性移住者の経験に焦点が当てられる一方で、再生産労働の国際分業の進展が、国境を越えて再生産労働に従事する第三世界出身の男性移住者をも生み出してきたことには、これまでほとんど注意が向けられてこなかった。

しかし、近年、後述するように男性移住家事労働者に関する研究も少しずつ公開されるようになってきている。さらに、少し視野を広げると、専門職として国際移住する女性の夫として移住した男性の経験、あるいは国際移住した妻に残されて主夫となった男性の経験を、男性性の再構築という視点から考察する研究も公開されている（例えばジョージ、S.M., 2011 (2005) 『女が先に移り住むときー在米インド人看護師のトランスナショナルな生活世界』など）。これらの研究は、ジェンダーなき存在であるかのように見られてきた男性移住者（非移住者）の移住（非移住）経験が、いかにジェンダー化されたものであるのか、さらに家族やコミュニティのジェンダー関係の変容をより複雑な形で捉えるためには、男性の経験に注目することがいかに重要であるのかを、彼らによる多様な男性性の再編過程とのその影響を描くことによって示してきた。本研究では、これら近年の男性移住家事労働者の研究、および女性移住者の夫を対象とした研究を踏まえつつ、男性家事労働者の移住経験を「男性性の再編」という観点から考察することを試みる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、文化人類学と社会学を専門とするフィリピン研究者の協働により、再生産労働の国際分業に男性移住労働者がいかなる形で吸収されているのかを、フィリピンからイタリアへの移住を事例に即して明らかにすること、イタリアのフィリピン出身男性家事労働者を対象として、彼らの移住経験を、男性性の再編という観点を導入して考察すること、これらの事例研究を通し

て、国際移動とジェンダーという研究領域における男性性の研究の実証的理論的重要性を示していくこと、であった。

3. 研究の方法

研究の方法は、文献研究と、イタリアで家事労働者として就労するフィリピン系男性移住者、およびその家族などへのインタビュー調査、そして参与観察であった。文献研究の課題としては、男性性と国際移住に関する研究状況、およびフィリピンからイタリアへの移住の概要の把握を目指した。現地調査では、イタリアにおいて家事労働に従事するフィリピン出身男性とその家族を主たる対象として、インタビュー調査と参与観察を実施した。調査項目としては、移住以前の生活、移住経緯、移住後の生活、仕事内容、仕事への見方、家族関係、故郷との関係などが挙げられるが、調査状況に応じて各調査者は調査項目を適宜拡張、修正した。またフォーカス・グループ・ディスカッションも、部分的に用いられた。

なお、研究代表者（長坂）と研究分担者（小ヶ谷）は、最終年度である 2016 年度にイタリア調査をそれぞれ約 10 日間実施した。

4. 研究成果

(1) フィリピンからイタリアへの移住

イタリアにおいてフィリピン人移住労働者が増加し始めたのは 1970 年代後半であった。1970 年代は、イタリアが移住者送出国から受入国へと転換していく時期でもあった。イタリアのフィリピン人に関する研究では、当時、カトリック教会に支援を受けた少数のフィリピン人移住者が、イタリア都市部で家事労働職に就いていたと指摘されている。

登録フィリピン人数は、1981 年の 1500 人前後から 1991 年には約 15000 人に増加し、その後、2001 年に約 50000 人、2008 年に約 120000 人をそれぞれ超え、そして 2016 年の居住許可保持者の統計では 167000 人以上となっている（国立統計局）。2016 年の居住許可者の統計で男女比を見ると、女性が 57%となっている。

イタリアへのフィリピン人の移住の特徴として挙げられるのは、第一に、都市部の家事労働職に集中していることである。イタリアでは、1980 年代以降、それまで家事労働職に就いてきた農村部出身女性の就業機会の拡大、ミドルクラスの女性の労働市場への参入、ケア労働への公的支援の不足、イタリアにおける高齢化傾向などを背景として、外国人家事労働者への需要が高まった。その中でフィリピン人は、1980 年代半ば頃から、相対的な学歴の高さや、おそらくは初期のフィリピン人の就労評価の蓄積によって「優秀で信頼できる家事労働者」というエスニック・イメージが生成・定着したことで、家事労働市場において安定的なニッチを獲得した。

第二に、家族、親族、同郷の友人のネット

ワークを通じた移住が多かったことである。親族や同郷のネットワークを辿る移住形態はフィリピンの多くの社会において一般的なものであるが、フィリピン人がイタリアにおいて「優秀かつ信頼できる家事労働者」という評価を受けていたことは、こうした移住におけるネットワークの運用可能性を高めたと考えられる。実際、代表者と分担者の調査においても、フィリピンの特定の町から多数の移住者がローマに移住し、就労していることが確認されている。こうした親族や同郷の者への支援は、入国管理が厳格化されていく90年代以降も、家族再結合や雇用主による直接雇用という形で継続していった。

そのようなネットワークに依存した移住形態によってイタリアのフィリピン人家事労働者が増大していく中で、女性だけでなく男性もイタリアへと移住した。イタリアのフィリピン人に関する研究では、これら多くのフィリピン人男性は、先行する配偶者によって呼び寄せられ、職探しなどにおいても「女性中心のネットワーク」に依存していくと指摘されている。研究代表者による、農村出身のフィリピン人移住者の事例研究では、兄弟姉妹の紐帯を中心として多方面に拡大するネットワークへの依存というイメージも得られたが、いずれにせよ、1980年代以降、こうして親族などのネットワークから支援を受けた多くのフィリピン人男性がイタリアへと移住し、そして家事労働市場に吸収されていった。古い数字であるが、また先行研究の示唆によれば解釈に必要な数字ではあるが、2002年のイタリアの正規に就労するフィリピン人移住家事労働者の約25%は男性であった(全国社会保障保険公社報告書)。

(2) 男性性と移住

上で述べた通り、再生産労働の国際分業、あるいは「グローバル・ケア・チェーン」の中で移動する男性がいることには、これまで注意が向けられることが少なかった。国際移住とジェンダーを主題とする研究群において男性に焦点を当てた研究が少ないことは、この分野のレビュー論文でもたびたび指摘されてきたが、調査にもとづいた研究が公刊されはじめたのは、最近のことである。ここではそれらの研究のうち、本研究プロジェクトの対象であるイタリア、フィリピンを対象とした研究を挙げる。

イタリアとフランスの男性移住家事労働者の男性性との関連で論じた F. Scrinzi は、雇用主や家事労働者の派遣業者が、時に男性移住者の女性的な性質あるいは「家事労働に適した文化」を強調すること、家事労働職にある男性移住者たちが、女性にはできない仕事をこなす家事労働者となることで自らの男性性を再確認することなど、興味深い論点を提示している (“Masculinities and the International Division of Care: Migrant Male

Domestic Workers in Italy and France” *Men and Masculinities* 13(44), 2010)。

Scrinzi がイタリアとフランスの、様々な国からの男性移住家事労働者一般について論じているのに対して、R. Parreñas は、イタリアにおけるフィリピン出身の女性移住家事労働者について論じた *Servants of Globalization* (2001) の第2版(2015)に、新たに男性についての章を追加し、フィリピン人男性移住家事労働者に焦点を当てている。Parreñas は、イタリアにおいても家事労働者の大多数は女性であるが、フィリピン人の他の主要な移住先との比較では、イタリアは男性家事労働者の比率が最も高い国であること、イタリアの家事労働市場において女性の方が安定的な職を得やすいことが、男性達に経済面、法的地位の面で脆弱性をもたらしていること、植民地期には男性家事労働者が多かったという歴史的背景などから、家事労働職といういわゆる「女性職」に就くことによる男性性への脅威はあまり強調されない一方で、そうした脆弱性が彼らの男性性にとって脅威となっていることを指摘した。さらに、男性家事労働者たちは、家事労働の中の特定の部分を強調して家事労働職を「男性的」なものに再構築したり、女性的な家事を避けたり、コミュニティのリーダー的な地位を求めたりするが、そうした男性達による男性性の再構築は、女性の稼働力の上昇をジェンダー地位の格差の縮小、解消につなげることを妨げてきたと考察している。

これらイタリア側の調査に加えて、A. Pingol によるフィリピンに残された女性移住者の夫についての研究 (*Remaking Masculinities*, 2001) も本研究にとって重要である。Pingol は、調査を行ったイロコス地方の男性性は、家族を養う力、高い生殖能力に基礎づけられているとする。そして、妻の海外移住によって「稼ぎ手」よりも「ケアの与え手」となることが、彼らの男性アイデンティティにいかなる影響を与えるのかを検討した。Pingol は他の事例とともに、妻の送金がなくてもやっていけるようにすること、妻にあまり支援を要求しないことで威厳を保つことなど、男性性を再定義する「残された夫」の事例を挙げ、そうした妻の海外移住による状況変化が、常に男性性の喪失感につながるとはいえないことを指摘している。

これらの研究から、歴史的に形成された出身地社会における複数の男性性概念、それらとの関連での男性家事労働者による家事労働職についての見方、さらにそこでの男性性の再定義と社会関係への影響といった調査上の論点を確認された。

(3) イタリア在住フィリピン人男性の移住家事労働者に関する調査

以上のフィリピンからのイタリアへの移住状況、男性性と移住に関する文献調査の結果を踏まえ、研究代表者(長坂)と研究分担

者(小ヶ谷)は、以下のようにイタリア調査を実施した。

長坂は、フィリピン、ルソン島北部イロコス地方の農村部出身の男性移住家事労働者を対象として、移住過程、就労状況、仕事への評価、社会関係への影響について検討することを試みた。イタリアでのインタビューと参与観察を実施するとともに、同地方出身者を対象とした、過去のイタリアとフィリピンでの調査資料の再分析も行った。

まずかつての調査資料から、1990年代初頭までにイタリアに移住した農村出身者の、移住資金の支援者・提供者との関係を再分析した。イタリアに移住した23人の男性のうち、9人が妻あるいは婚約者による呼び寄せだったに対して、夫が先行して妻を呼び寄せた事例は1件だけであり、女性(妻)先行型の移住という先行研究の指摘は農村出身者にも当てはまること、他方で、兄弟姉妹間、あるいはより広い親族間といった、夫婦以外の呼び寄せ支援も盛んに行われていたことが明らかとなった。

今回の調査では、金融危機以降にイタリア全体の雇用状況が悪化し、移住者人口も増加する中で、男性にとって仕事を探すことが以前よりもさらに難しくなっている状況が確認された。しかしそうした困難な時期にあっても、親族間、同郷者間の連鎖移住の蓄積によって強固な、かつ広いネットワークを持っている農村出身者の間では、仕事を見つけにくいとされる中年男性が、安定した長時間の家事労働職に就いている事例も少なくなかった。

家事労働職への見方については、「女性が私の仕事をしようとしてもできない。All around だから」と料理、アイロンがけ、掃除のみならず、排水や電気配線の修理までできるという総合性が強調されるなど、家事労働職を再定義された男性性と結びつける語りが聞かれた。また「ここには家事労働職しかない」という言い方で、男性たちは家事労働職を否定的に語ることが多い。他方で、より「聞こえがいい」が、常に時間に追われるホテルでの仕事との対比で、「自分で(仕事を)オーガナイズできる」という家事労働者の利点が強調されるなど、職種間のヒエラルヒーが交渉されている状況も見出された。

さらに、インタビューや会話の中で男性家事労働者たちがフィリピンに建てた家について熱心に語っていたことから、以前のフィリピン調査で観察した故郷での行為(家屋の建設・購入や宴の開催など)を、イタリアで家事労働職に就く彼らによる、「稼ぎ手」としての男性性の再表明として考察していくことの可能性も示唆された。

小ヶ谷は、これまでのフィリピンからの女性の国際移動に関する自身の研究蓄積を踏まえて、男性の国際移動によるジェンダー関係の再構築を考察することを目的とした。ルソン島南部出身のフィリピン人コミュニティ

と接触し、カトリック教会でのフォーカス・グループ・ディスカッション(FGD)と、男性家事労働者へのインタビューを実施した。家事労働という「女性職」に従事すること、「外国人女性」の元で就労することというこれまでの男性家事労働者の研究で指摘されてきた点に加え、「女性先行型」移住において、上述したジョージの研究にある看護師である女性移住者による夫の呼び寄せと異なり、呼び寄せられる夫が妻と同じ職に就くことによるジェンダー関係への影響という点にも注目した。

インタビューや FGD からは、家事労働職という「女性職」については、「男のほうが向いている」、「体力があるし、高いところにあるものが取れる」、あるいは「アイロンかけも男のほうが上手い」など、家事労働の中でも特定の職務はむしろ「男性に向いている」という言説が生産されていることがまず確認された。また、「男性向き家事労働」の一環として、たとえばベビーシッティングにおける「父親代理としての役割」が強調され、その中で雇用主女性との間のジェンダー関係と労使関係が交渉されているという論点も導き出された。

加えて、いわゆる第1世代としてではなく、1.5世代として親に呼び寄せられて若年で家事労働に従事するようになった男性にとっては、初職としての異国での家事労働への従事が、男性性の面でも、また職業経験の面でもきわめて辛い経験になっていることが明らかになった。移住労働、再生産労働と男性性の関係に、時間軸(移住経験・労働経験の蓄積による変化)を組み合わせて考察することの重要性が示唆された。

(4) まとめ

調査が最終年度に行われたため、資料の整理と分析は未だ途上にある。移住先で家事労働職に従事する男性たちが、家事労働職、あるいは自らの男性性を再定義することで、不安定で社会的地位が低い、「女性職」とされる職に従事することと交渉しているというこれまでの研究で指摘された点は、今回の調査でも確認された。その一方で、そこでの分析に、これまであまり取り上げられることが少なかった、世代による移住経験の違いや故郷での行為なども視野に収める必要性も示唆された。上述した Pingol による男性性概念の再構築の複数の可能性や、Parreñas による階級的に分岐した男性性の歴史的形成へ着目も加味しつつ、上記の論点について考察を深化させていくことが今後の課題となる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- 1 . 小ヶ谷千穂、「<移住家事労働者>という存在を考える：「個人的なことはグローバルである」時代において」『理論と動態』(社会理論・動態研究所)9巻、2-17、2016年、査読あり
- 2 . 小ヶ谷千穂、「書評 Kyoko Shinozaki 著 *Migrant Citizenship from Below: Family, Domestic Work, and Social Activism in Irregular Migration*」ジェンダー研究 (お茶の水女子大学ジェンダー研究所) 19号、213-215、2016年、査読無し
- 3 . 小ヶ谷千穂、「書評 佐伯芳子著『移住女性と人権：社会学的視座から』」女性労働問題研究会編『女性労働研究』60号、186-189、2016年、査読無し

〔学会発表〕(計 4 件)

- 1 . Nagasaka, Itaru, “Divergent routes and partial citizenship: A comparative analysis of child migrants with Filipino backgrounds in Italy and Japan”, International Symposium on Partial Citizenship of Family Migrants, 2016年10月01日,立教大学(東京)
- 2 . Nagasaka, Itaru, “Children living with “global care chains”: Family separation and reunification of Filipino young immigrants in Italy”, Networking Southeast Asia, Korea and Japan: Facing Urgent and Fundamental Issues, 2016年03月19日, 京都大学(京都)
- 3 . Nagasaka, Itaru, “Imagining Life outside Place of Settlement: Self-making Processes of Young Filipino Immigrants in Italy”, 114th American Anthropological Association Annual Meeting, 2015年11月20日, Denver (US)
- 4 . Nagasaka, Itaru, “Growing up in a transnational social field: Experiences of family separation and reunification of the Filipino 1.5 generation in Italy”, Seminar "Midi du CIRFASE: Normes, morales et modèles familiaux et sexuels", 2014年05月22日, Louvain-la-Neuve (Belgium)

〔図書〕(計 7 件)

- 1 . 長坂格,「移動の伝統」宮原暁編『シリーズ東南アジア地域研究 第二巻 「社会」』慶応義塾大学出版会, 67 - 84、2017年
- 2 . 小ヶ谷千穂,「フィリピンの海外雇用政策の推移と新しい課題：政策の長期化がもたらしたものは」宇佐美耕一・小谷眞男・後藤玲子・原島博編『世界の社会福祉年鑑2016』旬報社、85-102、2016年
- 3 . 小ヶ谷千穂,『移動を生きる：フィリピン移住女性と複数のモビリティ』有信堂高文社、全261頁、2016年
- 4 . 小ヶ谷千穂「開発と海外出稼ぎの複雑な関係」『開発社会学を学ぶための60冊』明石書店、181-182、2015年
- 5 . Nagasaka, Itaru “Growing up in a Transnational Family: Experience of Family

Separation and Reunification of Filipino Migrants’ Children in Italy.” In Khatharya Um and Sofia Gaspar (eds.) *Southeast Asian Migration: People on the Move in Search of Work, Refuge and Belonging*. Brighton: Sussex Academic Press. pp. 8-39、2015年

- 6 . 長坂格,「国境を越える家族」「トランスナショナル家族」「遠距離養育」比較家族史学会編『現代家族ペディア』弘文堂、273-275、282、286、2015年
- 7 . Nagasaka, Itaru, “Immigrating into a Segregated Social Space: The Case of 1.5-Generation Filipinos in Italy” In I. Nagasaka and A. Fresnoza-Flot (eds.) *Mobile Childhoods in Filipino Transnational Families: Migrant Children with Similar Roots in Different Routes*. Palgrave Macmillan, 87-116、2015年

〔産業財産権〕

- 出願状況(計 0 件)
- 取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6 . 研究組織

(1)研究代表者

長坂 格 (NAGASAKA ITARU)
 広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
 研究者番号：60314449

(2)研究分担者

小ヶ谷 千穂 (OGAYA CHIHO)
 フェリス女学院大学・文学部・教授
 研究者番号：00401688

(3)連携研究者

無し

(4)研究協力者

無し